

都難言協会報

東京都公立学校難聴・言語障害教育研究協議会

読み書き困難を示す学習障害児に対して 教育学的アプローチを果たす役割

横浜国立大学 准教授

後藤 隆章 先生



近年、読み書きの学習困難に対して、従来の医学的アプローチとは異なる教育学的アプローチが注目されています。教育的アプローチでは、診断に先立って介入を実施し、その効果の出方によって支援の必要性を判断します。この教育学的アプローチでは、早期支援が可能になることや、診断基準を満たさないまでも読み書きの学習困難を示す子どもも教育的介入を受けることができるなどのメリットがあります。

そのため、教育的アプローチで多様な学習特性を有する子どもに対して適用可能な教材、教具を整備しておくことが重要です。

また、読み書き学習の支援を考える際には、学習に対する自尊心の低下や、努力をしても効果が得られないことを学習し、無気力の状態に至ってし

まう学習性無力感の形成の回避を考慮する必要があります。この点を踏まえ、読み書きの学習困難での支援と通級指導学級・教室での支援について述べたいと思います。

① 通常の学級での支援

通常、読み書きの学習内容は、仮名文字から漢字へと移行するため、読み書きの学習困難の状態像も発達に伴い変化します。読み書きの学習困難を示す子どもの多くは、拗音や促音などの特殊音節の表記につまずきやすく、その困難さがその後の漢字の読み書き学習の困難を生じさせるリスク要因であることが分かってきました。そのため、通常の学級の中で特殊音節の表記の読み書きが安定しているかについての情報は、早期から支援を行う重要な評価

ポイントになります。

通常の学級での支援を検討する上では、宿題の取り組みについても、配慮する必要があります。宿題では一斉に同じ課題が提示されることが多いのですが、学習特性に多様性を考慮する場合には、宿題の内容についても多様性を踏まえた課題設定が必要です。課題内容や順序、実施方法が学習者ごとに選択できるシステムや、解くことが困難な課題に直面した際にどのように振る舞えばよいのか具体的手続きを示しておくなどの配慮を行うことで、より主体的に学習に取り組めるようになると思います。また、日頃より、子どもが学級の中で、誤った解答や誤った考え方に対して批判しないことや、ICTの活用を含めて、様々な学習の方法を認める雰囲気学級内に作ることも重要です。

② 通級指導学級・教室での支援

読み書き学習に困難を示す子どもにとって、在籍学級での授業をいかに有意義な時間とするかは重要です。通級指導学級・教室では、個々の状態に応じて支援課題を設定することができ、在籍学級の学習内容と連動した支援を行うことで、より高い支援効果が期待できます。

読み書きの学習困難を示す子どもの

なかには、一字単位だと読み書きができるのだけれども、単語や文になると極端に苦手を示すことがあります。その場合、在籍する学級で行われている学習単元について、担任教員から聞き取っておき、その学習単元に登場する用語の意味、読み方、書き方を予習的に学習することで、在籍する学級での学習が理解しやすくなります。

読み書きの学習に困難を示す子どもたちは、度重なる「読めなかった」「書けなかった」経験から、自尊心を低下させ、学習性無力感を形成させやすいです。このようなリスクを軽減するためにも、最近では、ドリル学習が苦手な子どもでも利用しやすいように工夫されたプリント教材などがインターネット上に整備されていますので、教材に関する情報を把握しておき、子どもと一緒に取り組みやすい学習手続きを見つけていくことが重要だと思います。

最後に、たとえば読み書きの学習困難があつたとしても、工夫をすれば、問題に取り組める、課題を解決できるという経験を通じて、新しい課題に挑戦してみたい、そのような人格を形成させることが「教育」の果たす役割だと思います。是非、先生方と一緒にその役割を担うことができればと思っています。

都難言協
第6、7回
専門研究会WISC-IV検査結果と支援の実践
の橋渡し——つまずきの原因と対応の探求——

元筑波大学教授 大六 一志 先生

都難言協
第8回
専門研究会吃音のある学齢期の子どもへの支援
——青年期を乗り越えるために今できること——

北里大学講師 原 由紀 先生



WISC-IVの結果から支援方法を考

える時に大切にしたいポイントは、①「熟達」②「自覚と工夫」です。①は長期にわたり毎日地道に練習した結果、意識しなくても自動的にその作業や処理を実行できること、②は必要な支援を自ら調達できるように自分の弱点と長所を自覚すると共に工夫ができることです。次に各指標の結果から支援方法を考えます。

【VCI（言語理解）】

言語の理解力が弱いと、発話や理解の流暢性が問題になります。また語彙が少なく、作文、発表、文章読解が苦手です。WISC-IVでは文法やことばの流暢性などは得点に反映されにくいので、できれば言語機能検査を実施することをおすすめします。言語の理解力の弱さへの対応策として、視覚の手がかりが有効です。イラスト、写真、手順表、5W1Hの枠、絵カードなどを用いると効果的です。

【PRI（知覚推理）】

日常の問題として、黒板に注目できず、板書を正確に写せない、漢字書字が苦手、算数表記における段取りが苦手などが挙げられます。ビジョントレーニングやパズル課題を行い、正確さと流暢さ（熟達）を目標にします。

【WMI（ワーキングメモリー）】

ワーキングメモリーは一時的な記憶力で、聞く力です。ワーキングメモリーが弱いと、当面の目標・目的を忘れやすかったり、会話が脱線しやすかったりします。また、丸暗記や暗算も苦手です。対応策として、聞く力や複数のことを同時に処理するトレーニングを行うてください。また、ワーキングメモリーが低く、読み書きが苦手な児童には、五十音の熟達、文節に区切り線を入れる練習、特殊音節表記では視覚モデルや動作化を用いる練習が効果的です。

【PSI（処理速度）】

PSIが弱い人は、①他者と同じペースで作業できない。②集中や意欲が続かないなどが問題になります。①は時間を計測し、少しずつ早くする。何に時間がかかっているのか分析する。②は作業構成で間に気分転換をはさんだり、作業の流れを明確にしたりすることが効果的です。

知能検査の目的は、問題の原因と対策を知ることにあります。まず、本人の問題意識を聞き、検査結果からできることを確認し、問題を解決する方策と一緒に考えることが大切です。

(文責 田中 健太)

【吃音基礎知識】

吃音は、1000人のうち5〜8人が発症し、そのほとんどが幼児期に発症します。75〜80%は自然治癒すると言われ、その要因として、①女兒②よくなつた家族がいる③音韻や構音の問題を併せもつていない等が挙げられます。自然治癒する子どもも、吃症状が消失するまで2〜3年かかったり、発吃から6か月〜1年で急激に軽減したりすることがあります。つまり、小学校で出会う吃音のある子どもたちは持続する可能性の高い吃音であり、何らかの介入が必要な子どもである可能性が高いと言えます。

【吃音のある学齢児への支援】

吃音のある学齢児には、いろいろなタイプの子どもがいます。例えば、吃症状は多く出ているが、発話意欲が旺盛で自分の意見をしっかりと伝える子どももいれば、吃症状は少ないかほとんど見られないが、どもるのが心配で、分かっているにもかかわらず発表しない子どももいます。小学生段階では、心理面の進展に個人差が大きく、少しのことでも変化もする時期です。

【指導方針】

○発話に対するアプローチ：発話はコントロール可能。発話の成功体験を増や

・斉読法・色々な話し方ゲーム・軟起声等の練習を通して、話すことが大好きな子どもでいてほしいです。

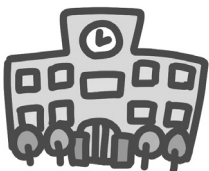
○心理面に対するアプローチ：吃音について理解し、怖れる必要はない、自分ってこんなにいいところがあるということに気付く。

・吃音やコミュニケーション、自分自身に対して、子ども達が否定的感情や態度をもたないようにすること、否定的態度をもつてしまつたら、より肯定的なものにし、それを維持する指導を行うことが大切です。

○周辺環境に対するアプローチ：吃音に對する正しい理解と協力を啓発。

・助けてもらいたい内容は、子どもによっても時期によっても違います。どうしてほしいか、聞いてあげられる指導者になってほしいと思います。

(文責 松井 伸二)



中学校難聴学級です

みなさん、こんにちは。都内の中学校難聴学級で構成される都難言協「中学ブロック」です。今回は、紙面をお借りして、中学校難聴学級とそこに通うお子さんたちについて、3つのお話をしたと思います。中学校難聴学級のことを、少しでも知っていただければ幸いです。

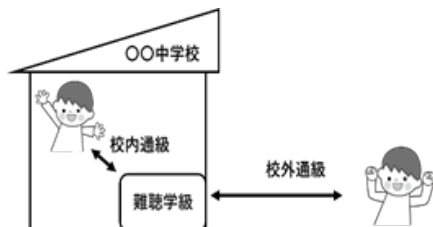
1. 難聴学級の数

今年度、品川区の中学校に新しく難聴学級が設置され、都内の難聴学級は13校になりました。しかし、小学校のきこえの教室の設置校が44校であることに對して、その数はあまりに少ない！右の図を見ても、難聴学級が設置されていない空白地域が多くあることがわかります。また、小学校きこえの教室に通級しているお子さんの数が約300名であることに對し、中学校難聴学級は約80名です。小学校6学年の半分としても、単純計算で150名は中学校でも難聴学級に通級していいはず。私立中学校や、ろう学校中学部など、さまざまな進路に進むことを考えても、公立中学校の中に、まだまだケアを必要としているお子さんがいる、難聴学級を必要としているお子さんがいるはずです。



2. 校内通級と校外通級

中学校難聴学級には、「校内通級」と「校外通級」の2つの形があります。「校内通級」は、難聴学級が設置されている学校に入学して通級するもの、「校外通級」は、難聴学級の設置校以外に入学して通級するものです。「校内通級」は、英・数・国の授業を難聴学級で受けることで、教科の要素を取り入れつつ、自立活動の指導を受けたり、毎日の在籍学級でのフォローや、行事や考査での情報保障など、きめ細かいケアを受けたりすることができます。しかし、区外や市外のお子さんは、設置校への入学が認められないことが多く、「校外通級」の形になっています。「校内通級」を希望する区市外のお子さんでも設置校に入学できるようになることが大切だと考えます。



3. 中学生のアイデンティティ わたしはだれ？

ある時、中学生が聞いてきました。「わたしって障害者なの？」う～ん、皆さんなら、なんて答えるでしょう。「聞こえる人」、「聞こえない人」、「どちらでもない人」。中学生は迷います。まわりと少しちがう自分。でも、あんまりちがわない自分。私はいったい何者なのか。自分のアイデンティティを決めるのは自分自身であり、きっと長い時間がかかります。中学校はそのスタート地点と言えます。悩み、迷うお子さんたちのそばに立ち、一緒に考え、心に寄り添いながら歩んでいきたいと思っています。



おわりに



聞こえる人が圧倒的に多いこの世の中は、「聞こえる社会」とであると言えます。難聴の中学生は、聞こえる同級生に囲まれた「聞こえる社会」で懸命に生きています。私たち中学校難聴学級は、お子さんたちの「聞こえる社会で生きる力」を育てながら、自分自身に自信をもって人生を歩んでいけるよう、支援を続けていきたいと考えています。聞こえのことでお困りのことがありましたら、ぜひ、お近くの中学校難聴学級にお問い合わせください。お待ちしております。

文責 大田区立御園中学校 難聴学級 依田 広太郎

◇ 学級紹介 ◇

中野区立桃花小学校 きこえとことばの教室

本校は、J R中野駅から徒歩7分のところにあります。中野区では、きこえとことばの教室はここにしかありません。初めは桃園第三小学校という名前でした。

まず昭和43年にきこえの教室が開設され、翌昭和44年にことばの教室が開設されました。そして、閉校・統合に伴い、平成20年に桃花小学校となり、平成23年新校舎建設に伴い移設し現在に至ります。本年、開校10周年となりました。当教室では、担任4名できこえ（難聴）とことば（言語障害）に課題のある児童の指導にあたっています。

今年度も個別指導に加え少人数でのグループ活動を行っています。難聴と吃音のグループに分かれ、同じ課題がある児童同士で安心して話せる場を設定し、皆で楽しく遊んだり困ったこと等について話し合ったりしながら、自己理解も進めています。その他に7月にお楽しみ会、12月に学習発表会、3月に終わりの会等、全員で行う行事があります。

（文責 高崎健一）



ブロック研究会のお知らせ

江東ブロック

- 【テーマ】言語発達に課題のある児童への指導
～言語を豊かにするための指導の工夫～
【講 師】大伴 潔 先生（東京学芸大学 教授）
【日 時】平成31年1月29日（火）
14時から16時30分
【会 場】墨田区立押上小学校 体育館

多摩東ブロック

- 【テーマ】吃音のある児童の見立てと指導
【講 師】原 由紀 先生（北里大学 講師）
【日 時】平成31年2月12日（火）
14時から16時30分
【会 場】府中市立府中第一小学校 体育館

多摩西ブロック

- 【テーマ】言語表現に課題のある児童の指導
～LCSAを用いたアセスメントを通して～
【講 師】大伴 潔 先生（東京学芸大学 教授）
【日 時】平成31年2月26日（火）
14時15分から16時30分
【会 場】立川市立第八小学校 体育館

※参加される先生方へ

各会場に名札・上履き・靴を入れる袋をお持ちください。

事務局より

事務局では、今年度も、三連協（都情研、都弱視研）や都教委との意見交換会、関難言協、ろう学校との合同研究会などの窓口として、他団体との連携を推進してきました。

都難言協は各区市の分担金や東京都教職員研修センターの研究奨励費と、会員の方々の協力に支えられています。より質の高い研究を進め、「通級指導学級」制度の維持・発展を図りたいと思います。来年度も、ご協力よろしくお願いいたします。

編集後記

ご多用中の折り、原稿をお寄せいただいた皆様に熱く御礼申し上げます。

本会報を日頃の教育活動に役立てていただければ幸いです。

都難言協会報

代表者（会長）鈴木 稔
責任者（広報委員長）福田 俊彦
発行日 平成三十年十二月一日
発行数 五七〇〇部
印刷 有限会社 正陽印刷